

クリスマスのおはなし

と 幼 児

上 沢 謙 二

マ繰返されて飽きたお話

年毎にクリスマス

スがめぐってくる。今年も千九百五十三回目のクリスマスがめぐってくる。

クリスマスがくる毎に語られるのは、キリスト誕生のものがたりである。しかも、幾度くりかえされても飽きないのは、キリスト誕生のものがたりである。何千回何万回語られて、その度毎に、小さなつぶらな瞳をかがやかせ、まばたかせたことだろう。

だから、キリスト誕生に関するものがたりは、おそらくかぞえきれないほどあるだろう。実にいろいろな人によって、いろいろな書かれ、作られた。マクリスマス・トリイの話 ものがたりとして最もあらわれたのは、チャールズ・デッ

ケンスの「クリスマス・カロール」と、ヘンリー・ヴァンダイタの「ゼ・アザ・ワイズマン」であろう。しかしいずれも結構が複雑で、情景が曲折して分量的にも長く、子供へのお話としては、必ずしも適当でない。

ものがたりの世界から降って幼児ばなしの世界へはいると、よく取りあげられる題材は、クリスマス・トリイである。これに関する童話はずいぶん多いが、汎く知られているのは、アンダーセンの「フアー・トリイ」である。山に生えた樅の木が、町の華やかな生活とクリスマス・トリイの話を聞いて、そこへいきたいとあこがれる。遂に望みが叶って有頂天になっていると、お祝いは終って、ツリイは棄てられて焼かれる。灰になりながら「ああ

やっぱり山にいたほうがよかった」と思う筋である。こういうような行き方の童話は他にも少なからず見られるが、ジョーヂ・コーの「仕事を見つけたもみの木」も、大体似ている。但しコーのは、山のもみの木がクリスマス・トリイになつて「ああ、自分のような小さなものでも、神さまはちゃんと仕事を与えてくださる」と悟つたところで終りになつて

いる。ところが、ノルウェーの伝説に「小さいもみの木」というのがある。森の大きな木の中に生えた一本のもみの木が、じぶんが小さくて、何の役にもたないことを悲しんでいると、そばの白樺が「クリスマス・トリイになれるかも知れない」と教えてくれる。わけはわかなくなつたが、もみの木はそうなりたいたいと思つていると、或る日、子供が来て、伐られて家へもつていかれて、クリスマス・トリイになる。びっくりしてよろこんで「ああ、私は何の役に立つのかわかつた。そうだ、私は人間の子供たちを楽しくさせるためにあつたのだ。私は小さくておとなしいから」とひとりごとするところで終っている。アンダーセンの「フアー・トリイ」と構想に共通なところ

がある。或はアンダーセンはこれに負うところがあるのではなからうか。

クリスマス・トリイの伝説もたくさんあるが、ドイツに伝わる聖ウィルフレッドに関するものが、いかにも童話的である。彼が伝道のため、雪の日に蚕地をあるいていると、雪神の木と信じている大きな樅を叩んで、泣きながら娘を人身御供として殺そうとしている土人たちを見たので、彼等に真の神の愛を説き、樅の木を伐り倒した。おどろきよるこんだ土人たちは、伐ったあとへ生えた新しい樅を、天幕へもってかえって祝った。それが、クリスマス・トリイの起りだといふのである。マサンタ・クロウズの伝説 子供が待ちかまえているクリスマス・プレゼント。その世界的分配者ともいふべきサンタ・クロウズの童話は実に多いが、取立て、代表的といふようなのは見当らない。

しかし、伝説には代表的なのがある。小アジアのミラノの監督聖ニコラスにまつわるそれである。情け深いニコラスは始終人を恵んだが、当の相手にさええ知れないように、いつもそつとやった、年を取ってからは、白い長いひげをはやして、白い馬にのってあるい

たが、子供が大きいので、よくいろいろなものを分け与えた。彼が死んだのは十二月で記念の祭をしたが、それがいつかクリスマスといつしよになつて、セント・ニコラスといふ名はサンタ・クロウズに変わり、白い馬は馴鹿カになつたといふのである。

マチャイルド・クライスト 子供のクリスマス——即ち「チャイルド・クライスト」に関するものがたりは数多くあつて、ブラッドフォッドは「チャイルド・クライスト・テールズ」といふ本を著わしているくらいだが、中で、聖クリストファーの伝説が流布されている。力の強い彼は、世界で一番えらい王様に使えようとして、方々がして、結局クリストがそれだとわかつたが、どこにいるかわからぬい。或る賢い人に「川を渡る人たちを渡してやれば、クリストに遇える」といわれて、岸に小屋をつくつて住んで、大雨大風の日でも、よるこんで渡してやる。或るあらしの真夜中に、ひとりの子供の声を目をさましてとびおき、肩へ乗せて川へはいったが、その重いこと。やつと向岸へつくと、それが子供のクリストだつたといふのである。

それから、子供のクリストはクリスマスの

前の晩、あわれな姿の子供になつて、トリイが飾られ、御馳走が並べられた方々の家の戸をたたく。けれどもことわられる。遂に貧しい一軒の前に立つと、迎え入れられて親切にされる。そうして夜中になると、俄に部屋じゅうがかがやいて、あわれな子供は子供のクリスマスになつて、貧しい一家を祝福する。こゝういふ筋のお話は幾つかあるが、比較的ドイツに多いようである。

マスベインとロシアの伝説 駱駝に乗つてはるばる山、川、砂漠を越えて旅してくる博士たちは、幼児の興味をひく題目である。前記の「ゼ・アザ・ワイズマン」は、それに取材したものだ。マスベインの伝説「クリスマスの王さまたち」や、ロシアの伝説「パプウスカおばあさん」も、それに因んだものである。

前者は、或る町の路次の貧しい長屋の子供たちが、同じ長屋に住むおばあさんから、クリスマスにおくりものをもつてくる王さまたちの話をきく。ところが、そこへは一度も来たことがないので、無邪気な子供たちは遇つて連れてこようと思つて、町の外へ迎えにゆく。夕方になつても来ないので、みんなかえ

つてしまふが、ひとりの子供だけ残つて、乗つてくる動物にやる草を取つて待つているととうとうやつてきて、子供の案内で、はじめで路次へはいつてくる。それから毎年王さまたちが来て、貧しい子供たちも毎年おくりものをもらへるようになったという内容である。後者は、雪のふる晩、一軒家の中に、ひとりバブスカおばあさんが火にあたつていると、三人の老人が戸をたゝいて「神様の赤ちゃんがおうまれになったから、お祝いのおくりものをもつていくのだが、いっしょにいかないか」と誘われたが、ことわる。しかし翌朝になつてから思いなおして、おくりものをもつて出される。けれどもどつちへいっていいかわからない。道ゆく人に聞くと「もつといけ」といわれるので、大いそぎであるいて、今もまだたすねまわつてゐる。クリスマス前の晩になると、このおばあさんは一軒ママへはいつていって、キリストへあげるはずのおくりものを、代りに、その家の子供の枕もとへおいていく——というので、この伝説はクリスマスのおくりものとも関係することになる。

マクリスマスの話の話し方 このようなク

リスマスのお話を幼児に話すとして、どんな心が必要だろうか。

問題になるのは、時代が隔たり、場所も隔たつてゐるということである。だから、風俗習慣がちがう。まずそれを理解させなければお話の中で、時々「わからないこと又はもの」にぶつかつて、全体としての興味は減じ、印象は薄れ、感銘は弱まる。つまり充分な効果は發揮されにくいことになる。これは、話者として考えなければならぬ。

ところで、見馴れない、聞き及ばない、ちがつた風俗や習慣を、一々説明して理解させることは、少年少女ならまだしも、幼児の場合には到底困難だろう。だから、幼児ばなしには、こういう風俗や習慣には全然ふれない方がよい。それはヌキにして、お話を進めるのである。特別に現代化しようと努める必要はないが、尠くとも現代の知識に合わないもの——もつと適切にいえば、現代の幼児の理解と興味を超えるものは取入れないことである。そうでないと、正しい幼児ばなしにはならないだろう。何となれば「わからない幼児ばなし」なんてあり得ないからである。だから、こういう点は思いきつて切り棄て、よい

と思う。

次に、キリストの取扱方である。キリストは神のひとりごで、常人とはちがう。そこに独自の意味があり、独特の使命がある。だから、話の中でも他のものと区別して取扱われねばならない。たとえばキリストに関する限り敬語的尊称的な言葉を使わなければならないとか、キリストがあらわれる場合は、話し方を特に荘重にしなければならぬとかいうようなことである。これはキリストを教主と信ずる信仰から発生したもので、一般的な問題とはいえないかも知れないが、とにかくこういう問題が存在する以上、話者としては一応考えてよいことだろう。

キリストが教主であるかどうかは姑く措くとして、彼が偉大な人物であることは、クリスマスのお話をするほどの人ならば、誰でも認めているだろう。だからこそ、彼の誕生のお話をしようという気になるのだろう。偉大な人物に対して、尊崇の思が湧き、敬慕の情が生まれるのは自然である。その思と情を自然にお話の中にあわせばよい。否、話者が衷に抱く思と情とは、自然にお話の中にあられぬではないのである。敢てもつた

なくしようなどとすると、そのお話は硬い窮屈なものになってしまつたろう。実は、キリストを神のひとりごと信ずる者が、キリストのお話をするにすれば、どうしても、もつたいたなく莊重になるだろう。それはそれで自然なのである。要するにお話は自然を尊とぶ。「敢て」という人為的な按排が加わると、味いも力もなくなつてしまふ。

そこで話者としては、心にあるままのキリストを語ればよい。二千年前の離れた人物でなく、特にもつたいない存在でなく、今、自分が感じ考えているキリストを、ひたすらに話せばよい。そうすれば、二千年前の、遠いユダヤの人物は、今、ここに生きてくるのである。そうすると、聴く幼児たちも親しみを感ぜ、興味を湧き、印象を生み、感化を受けるようになるのである。話者は、キリストを幼児のものにし、幼児をキリストのものにしなければならぬ。それには遠く離すよりも近づけること、高く挙げるよりもそばにひきよせることである。

マ、幼児はなしの二つの見本　　そういう立場から話されたクリスマスのお話を、一つ見本として掲げよう。

「むかしむかし、若いおじさんとおばさんがいました。おじさんの名はヨセフ、おばさんの名はマリヤといました。ある時、御用があつて、ヨセフさんとマリヤさんは遠くへいくことになりました。それで、マリヤさんは驢馬にのつてヨセフさんは驢馬をひいて出かけました。原っぱをおつて、お山をこえて、川を渡つて、カッポカッポといきました。そうして、そこへつくと、もう夜になつて、まっくらになりました。マリヤさんはとても疲れたので、宿屋へいって、トントンと戸をたたいて『もしもし、今晚ひとばんとめてくださいませんか』とめてくださいますか』という、中からへんじがありました『だめだめ、お客がいっぱいだからだめですよ』それからほかの宿屋へいって、トントンと戸をたたいて『もしもし、今晚ひとばんとめてくださいませんか』という、中からへんじがありました『だめだめ、お客がいっぱいだからだめですよ』困つたお客が見えました。『ああ、あすこへいってみよな』ヨセフさんは方々見ると、むこうにあかりが見えました。『ああ、あすこへいってみよな』。いってみると、そこは宿屋でない、うまやでした。うまやですから、人はいません。中にいるのは、馬や、牛や、羊でした。けれども、ヨセフさんも、マリヤさんも、馬や、牛や、羊がすきでした。それでドンドン戸をたたきました。『もしもし、今晚ひとばんとめてくださいませんか』。そうすると、中からへんじがありました『よろしうございます、ヒーン』。『いらっしやい、モー』。『おはいりなさい、モー』。『ありがとうございます、それでほめんどください』。それでヨセフさんとマリヤさんは、うまやの中へはいっていつてやすみました。だんだん夜中になると、馬さんも、牛さんも、羊さんも、ぐうぐう眠りました。けれども、ヨセフさんとマリヤさんは眠りませんでした。だって、とてもうれしくて眠れなかつたのです。どうしてつて？。かわいいい赤ちゃんが生まれたのですもの。ヨセフさんはお父さんに、マリヤさんはお母さんになつたのですもの、ね。赤ちゃんはオギヤアオギヤアと、元気な声を出しました。『この赤ちゃんに何という名をつけようか』と、ヨセフさんがいうと、マリヤさんは『イエスとつけましよう』と、答えました。赤ちゃんは『イエス』という名がついたのがうれいように大きな声で、オギヤア、オギヤア！といいました。その声に、馬さんも、牛さんも、羊さ

んも、目をさました『ヒーン、おや、赤ちゃんが生まれたよ』『モー、かわいい赤ちゃんが生まれたよ』『モー、男の赤ちゃんが生まれたよ』。ほら、そこはうまやでしょう。だから、お手伝する人もいません、着物もありません。おふともありません。それでお母さんのマリヤさんはじぶんで布を出して、着物のかわりに、赤ちゃんを包みました。そして馬や、牛や、羊がたべるものを入れる桶の中へ、粟をしいて寝かせました。そしてユラーリユラーリゆすりながら、歌をうたってやりました。『坊やはい子だねねしな、坊やのお名前何としよう、よい子のイエスとつけましょう。おべべのかわりにきれまいてふとんのかわりに粟しいて、寝床のかわりに桶に寝て、よい子のイエスはねんねしな』。赤ちゃんのイエスさまはよいお子でしたから、着物がなくても、ふとんがなくても、寝床がなくても、泣きも、むずかりもしないで、おとなしく、スースーとねんねなさいました。それを見た馬さんはいいました『いい赤ちゃんだね』牛さんはいいました『りっぱな赤ちゃんだね』羊さんはいいました『えらい赤まやんだね』。そうしてみんないっしょにいいま

した『おめでとう、ヒーン、モー、メイ』。

〔註〕 クリスマスの物語については左の拙著があります。就て見られれば幸いです。

世界くりすます童話集 富山房

世界クリスマス伝説集 中央出版社

(栃木県・鹿沼幼稚園長)

「教育実指導研究会集録」

お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 幼児教育研究会

A5判 一三〇頁
頒価 一五〇円
十六円

本書は去る六月四、五、六の三日間、お茶の水女子大学附属の小学校と幼稚園とが、同大学教育学部の協賛を得て開催した教育実指導研究会に於て行った講演研究、実地保育、協議討論レクリエーションなどのすべてにわたり、当日行われたそのまゝを集録したものであります。理論と実際の両面に於て、実地保育に携わっておられる方々のよき参考書であることを信じ、御一読を切におす、めいたします。

○本書御購読についての注文申込はフレジベル館宛お願い致します。

▽第二回全国モデル幼稚園

協議会開催さる

去る十一月六日、七日の両日にわたつて、兵庫県明石市立播陽幼稚園において、全国モデル幼稚園協議会、明石市教育委員会の主催また文部省、兵庫県教育委員会、義務教育完全施設全国協議会等の後援を得て、第二回全国モデル幼稚園協議会が開催された。

協議会第一日目は、会則変更、役員改選、事業計画審議、予算審議、宣言決議等がありまた各地の幼稚園から集まられた先生方の熱意あふれた研究発表が行われ、続いて、第二日目も分科会、研究発表のほか、播陽幼稚園児四クラスを対象に、実地保育があるなど、多数の参加者による熱心な研究が続けられた。

——(文部省)——

× × ×

× × ×